

§6-2. 今後の課題と展望

【刺激の種類追加による調和の法則性の確立】

本研究において、一連の実験より感情次元による色彩と香りの調和性に関して、比較的安定した法則的結論を導くことができたと考えられる。異なる感覚次元である色彩と香りの調和性に着目した研究として、はじめての提案と思われる。したがって、今後の課題としては、まず、刺激の種類を増やし、精度を高めることが挙げられる。特に、香り刺激に関して、本研究では、精油として入手可能なものに限定したが、アニマル系や食品系、フレグランスの基となる香りなど、様々な種類を追加し、2次元上で歪みの生じないように、多数の種類を試みる必要性が感じられる。

そして、色彩との調和性に関して、より精密な法則性の検討を目指す。特に、調和性判断の認知的プロセスの検討を試みることにより、香りの可視化（見える化；Visualization）も可能になると期待できる。香りは、目に見えるものでもなく、現時点では人間が弁別可能な種類が、全ては明らかにされていない。たとえ明らかにされている範囲を扱ったとしても、化学的成分の分析結果と知覚レベルでの特徴との関わりを指摘することは困難なようである。一方で、色彩は、ニュートンによってその物理的現象が明らかにされており、それと感情的構造との関わりも比較的安定した報告がなされている。そのような色彩というスコープを用いて、香りを整理することが可能になれば、少なからず嗅覚研究の発展にも貢献できるものと思われる。

【組み合わせによる効果の更なる検討】

次の課題として、色彩と香りの組み合わせによる効果に関して更なる追求の可能性が感じられる。本研究では色彩と香りの調和性に関して、一定の傾向を見出すことができたと思われる。しかし、調和による効果に関しては、検討の余地が多分に残されていると考えられる。本研究では、調和関係、すなわち感情次元上で距離の近い色彩と香りを組み合わせることによって、互いの特徴が相乗的に増すという比較的単純な傾向を得た。よって、色や香りに対する認知能力に関して、

本来人間も動物と同様の能力を持つか否かを検討する為に、個人差に着目した検討の必要性が感じられる。特に、本研究では調和の方に重きを置いたが、不調和による効果に関する検討の余地が残されていると思われる。また、調和関係、不調和関係のどちらにも当てはまらない色彩と香りの組み合わせ条件における効果に関しては、単純な加算や除算によって予測可能なものではないと推察される。精神負荷後の回復期に着目した場合、調和条件の方が不調和条件よりもストレス緩和効果が大きかったことを報告した。また気分評定により、不調和条件の方が調和条件に比べ不快な気分が上昇する傾向を指摘した。しかし、嫌悪されやすいペッパーの香りは、調和関係であるオリーブ色より、不調和関係にあるパールピンクのパネル内で提示された方が、少なくとも<UNPLEASANT>因子の得点は低かった。よって、嫌悪されやすい色彩や香りは、不調和条件の方がそのネガティブな特徴が緩和される可能性も考えられる。また、組み合わせの条件設定によっては、不調和関係の場合に必ずしも、ネガティブな心理的效果が生じるとは限らないと思われる。また、色彩調和論に限った場合、印象や、3属性の特徴が相反する色彩同士が調和するという理論も多く提唱されている。その多くは、特徴の異なる色彩同士を隣り合わせることで、互いの特徴が引き立て合うという対比の効果に基づくものである。そして、色彩と香りに関して、このような対比の効果が認められる可能性も予測できよう。調和、不調和の単純な組み合わせによる効果のみならず、様々な組み合わせによる効果に関して、何らかの法則的傾向を見出し、認知モデルの確立を試みる。さらに、心理的指標のみならず、いくつかの生理的指標も用いて検討することが挙げられる。心理的、生理的両側面から協調による効果を検討することで、より人間の精神的側面に及ぼす影響に関する検討を深めることを目指す。

【調和の法則性及び調和による効果に関する予測システムの構築】

最後に、以上の研究から得られた結果のデータベース化、及び予測システムの開発へとつなげることを考えている。調和の法則性のデータベース化、及び組み合わせによる効果に関する予測システムの開発を目指す。これは、我々の日常生活における住環境や職場空間、医療現場など、

様々な現実場面に応用可能なシステム構築の第一歩を踏み出せるもの考える。例えば医療現場への貢献としては、現在のところ、数年前に国立がんセンターでがん患者のストレス緩和やリハビリを目的として取り入れられた「バーチャル森林浴」の応用例などが念頭にある。これは、森の緑（色彩）や木々の間からこぼれる木漏れ日（光）など、森の景観が広がる空間において、フィトンチットや草花などの香り（香り）、鳥のさえずりや小川のせせらぎ（音）など、あふれる臨場感で五感に同時に働きかける形を再現した空間である。このような機器に対して、本研究結果を体系化し、心理的・生理的な効能別に切り替え可能なシステムを導入することで、汎用性拡大のきっかけとなると期待できる。これを発展させることで、いずれは効能別に、森林浴にとどまらない様々な空間を再現するシステム構築を目指すことが可能になると考えられよう。また、さらに発展させることも期待できる。特に香りは、人間の記憶と密接に関わっているという特徴を持つことから、高齢者や痴呆患者への健康、治療的効果を検証する余地も多分に残されている。このような検証結果をもデータベースに導入することができれば、より積極的な治療目的としても有益な機器の開発につながることを期待できる。また、研究成果を住宅メーカーなどに提供することで、我々の日常生活において、科学的根拠に裏付けられた色彩や香り、それらの協調によってもたらされる有益な効能を、様々な住空間に活用することができ、より豊かな生活が実現されると予期される。このような提案は、住空間の機能的側面とは離れた位置づけとされ、これまで後手に回される傾向も強かった。しかし、我々の生活に彩りを添えることで、精神活動の健全化にも少なからず貢献することができるものと考ええる。

以上のように、本テーマに対して、さらに精度を高めて認知モデルを確立し、日常生活に応用させることで、研究成果を具体的な形で社会に還元することを目指す。それにより、色彩や香りを扱う感性研究の発展と共に、私達人間の日常生活におけるより高いアメニティーの追求に貢献できると考える。本研究が足掛かりとなり、“well being”の実現に向けた新たな価値創造が可能になることを願う次第である。